プロヴァンス語（オクシタン語）のCTについて
Lo Tractament de *CT* en la lenga occitana

北　村　一　親

0. はじめに

Grundriss[sic] *der romanischen Philologie* の第1巻が1888年に刊行されたことにより、ロマンス語学はPhilologieからSprachwissenschaftへと一気に変貌して行く。これは編者であるGustav Gröber 自身の„ Methodik und Aufgaben der sprachwissenschaftlichen Forschung“という1章からも窺い知ることができる。[1]

同書の刊行後100年の間にロマンス語学においては、多くのロマンス諸言語の古文献資料や収集した諸方言資料が公刊されると同時に言語理論の進展にも著しいものがあった。しかし遺憾にも豊富な言語資料を目前にしながら、これらを利用することもせず机上の空論に終始する研究者も出現した。音声学の碩学、Bertil Malmbergですらスペイン語音韻史において - j|t - > - |tʃ - という開音節化理論を提唱したが、[2] 彼が少なくとも他のスペイン語諸方言の資料を、最善には本稿で扱うプロヴァンス語諸方言の資料を駆使していたならば異なった結論に達していたはずである。[3]

本稿は、プロヴァンス語諸方言の資料を用い、ラテン語子音連続CTのプロヴァンス語における変化形の地理的分布に関して13世紀の分布状況と今世紀の分布状況とを比較し、検証するものである。

1. 言語名称に関する問題

本論に入る前に「プロヴァンス語」と称される言語の名称について論じておきたい。

かつてはMidiという呼称で南フランス全体を総称し、そこで話される言語をプロヴァンス語とフランコ・プロヴァンス語[4] の区別すらもせずに扱うことがあった。Paul Meyerの編集なる *Documents linguistiques du Midi de la France*（1909）もこの延長線上に位置する。[5] ドイツ語圏やイタリア語圏のロマンス語学者が用いるprovenzalischあるいはprovenzaleもこれと軌を一にする場合が多い。この13世紀に始まるprovençalの呼称はProvincia Romanaから派生したprovincialisに由来する。[6]

トルバドゥール（trobador）自身はこの言語をleng(u)a romanaと呼んだ。例えばJaufre

---

1) *Grundriss*, S. 209–50.
2) Malmberg（1973）.
3) 詳しくは北村（1987）参照。
4) フランコ・プロヴァンス語に関してはKitamura（1990）参照。
5) P. Meyer（1909）p. iには「少なくとも全8巻になる」とあるが、第1巻のみで中断し、Ardèche, Ariège, Aude, Aveyronを扱う予定の第2巻（*ibid.*, p. ix）は実現しなかった。
6) Anglade（1921）pp. 6–7 &p. 7, n. 1.

Rudel は次のように詠っている。[7]

Senes breu de pargamina
Tramet lo vers, que chantam
En plana lengua romana,
A・n Hugo Bru per Filhol

しかし、これは畢竟するにラテン語に対する「俗語」という程度の意味しかもたない。[8] 因に、近世になって刊行されたプロヴァンス語文法書の表題に用いられたこの言葉は、当時の熱狂的な風潮で装飾されていたとしても、あるいは言語の位置付けの方向が誤っていたとしても、常に「民衆語」という意識を根底に含んでいる。例えば、ごく初期の文法書3点を示してみると、Bastero の *Apéndice al lenguaje romano-vulgar* (1756)、Raynouard の *Grammaire romane* (1816)、Mary-Lafon の *Tableau historique et littéraire de la langue parlée dans le Midi de la France et connue sous le nom de langue romano-provençale* (1842) の如くである。

また Raimon Vidal は 12 世紀末あるいは 13 世紀初頭の *Las Rasos de Trobar* において parladura de Lemosin (Lemosyn) という語句を使用している。[9] これも「Lemosin の話し方」という表現によってトルバドゥールの言語を代表させているだけで、決してトルバドゥールの言語は Lemosin 方言そのものであると言う訳ではない。[10]

Provençal と並んで lenga d'òc という名称も現代ではよく使われる。これは Dante の *De Vulgari Eloquentia* に出てくる有名な記述に由来している。(Dante はプロヴァンス語の中心地をスペインであると考えていた。)

《Alii hoc, alii oīl, alii si, affirmando loquuntur, utputa Hispani, Franci, Latini》[11]

中世のみにおける言語名称は別として、[12] 上述した provençal および lenga d'òc の名称には重大な問題が存在する。この両名称ともプロヴァンス語の下位方言の名称と衝突するからである。図1を参照されたい。前者はプロヴァンス方言 (Pellegrini の dialetti provenzali に相当) と、後者はラングドック方言 (Pellegrini の dialetti linguadocino-guiennesi に相当) と混同される虞れがある。Jules Ronjat は「広義のプロヴァンス語」に対し、Nîmes を含む本来のプロヴァンス地方の諸方言を「狭義のプロヴァンス語」として一応は区別しているが、[13] やはり問題を複雑にするだけである。

そこで、これらの名称を放棄し、Robert Lafont や Pierre Bec 等が提唱する occitan「オクシタン語」という名称を採用したい。[14] この名称は既に De Rochegude が Toulouse で出版し

7) Jaufre Rudel, II, 22–25.
8) Bec (1978) p. 64.
9) *Rasos*, 74. 75–76.
10) Appel (1915) S. cxxiii–cxxiv.
11) Camproux (1971) p. 15.
12) 本稿では近世のカタルーニャにおける言語名称は考慮しない。
13) Ronjat, I, p. xi. 同書のフランス語の綴字法はかなりの程度まで表音的である。例えば istorique (historique), fonétique (phonétique), aut (haut), i (y) 等。これは *L'Ourtougràfi prouvençalo* にて Felibrige の正字法を普及させようとした彼の見識と通じるものがある。Felibrige に関しては中原 (1951) に本邦での比較的早い時期における紹介がある。
14) Bec (1978) pp. 66–67.

た *Essai d'un glossaire occitanien pour servir à l'intelligence des poésies des troubadours* (1819) にも用いられているが、起源的には13世紀に溯り、Leire川の南の地方を示すOccitaniaの形容詞形occitanusに由来する。[15] 中世語の呼称としても「中世オクシタン語」あるいは「古オクシタン語」は何らの支障もなく使用できる。[16] 近年、本邦の研究者も旧来の「プロヴァンス語」を避け、「オック語」なる名称を使用しているが、本稿においては以後、「オクシタン語」を用いることとする。なお、オクシタン語の規範が未だ完全には確立していないため本稿の欧文タイトルにはラングドック方言形を使用した。

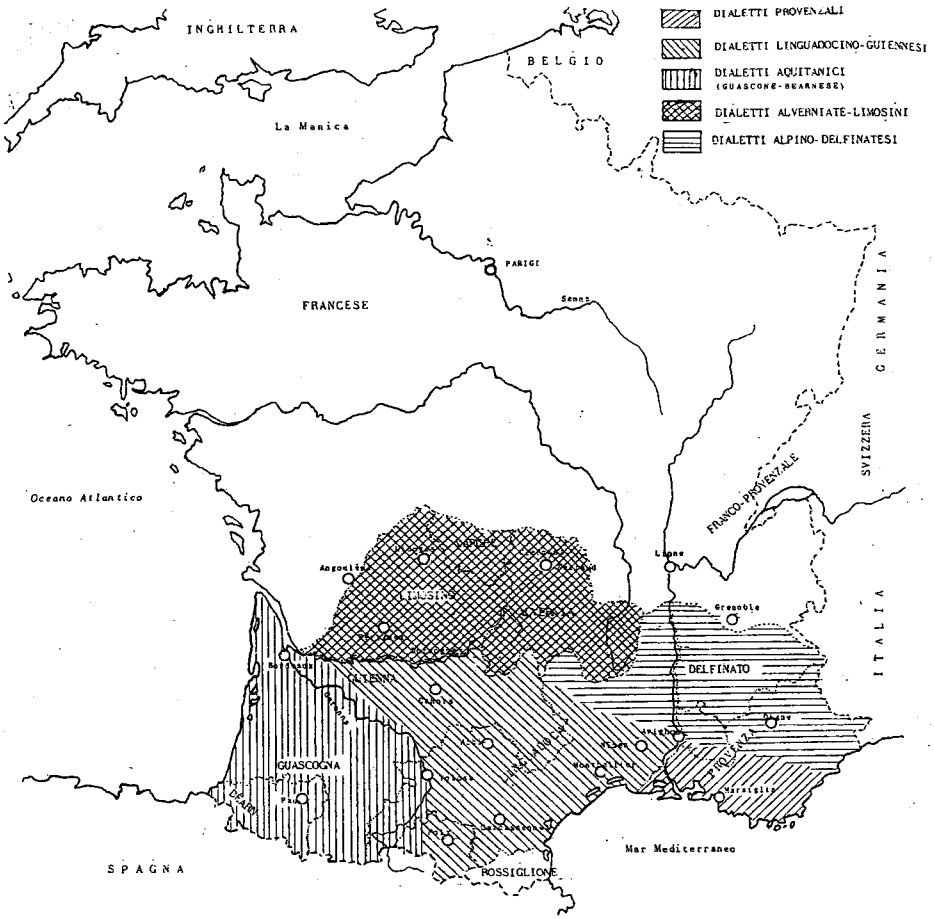

図1　方言区分図
(Pellegrini (1962) より)

15) A. Dupuy, *Historique de l'Occitanie.* (中内 (1982) 1047頁所引)。また Anglade (1921) pp. 9–10.
16) *Ibid.*, p. 11.

2. カタルーニャ語の帰属問題

本論に入る前にもうひとつ確認しておかなければならないのはカタルーニャ語の帰属問題である。

ロマンス語学においてカタルーニャ語の位置付けは常に論争の的となる。オクシタン語の下位方言としてP. Becは北部オクシタン方言・南部オクシタン方言・ガスコーニュ方言・カタルーニャ方言（カタルーニャ語）の四方言を区分する。[17] カタルーニャ語はイベロ・ロマンス語に属するのか、あるいはガロ・ロマンス語に属するのか古くから議論が分かれていたところにオクシタン・ロマンス語分立説が立てられ、ますます見解が錯綜してきている。[18]

古くはオクシタン語とカタルーニャ語とは非常に類似した言語であったことが知られているにもかかわらず、現在ではこの二言語はかなり異なった性格を持っている。[19] オクシタン語とカタルーニャ語との分化は13世紀頃と考えられている。Joan Berenguer de Masdovellesが15世紀にこの二言語を比較した時には全く異質なものとなっていた。[20] J. Angladeは*Grammaire de l'ancien provençal*において簡単な理由を述べて、[21] カタルーニャ語を除外しており、当のP. Becも*Manuel pratique d'occitan moderne*では何らの説明もなしにカタルーニャ語を取り扱わないでいる。本稿でもカタルーニャ語の言語学的位置付けは今後の課題とし、一応、カタルーニャ語を扱わないでおくこととする。 カタルーニャ語はオクシタン語がイベロ・ロマンス語との緊密な接触の結果、クレオール化したものかもしれない。また、オクシタン語のガスコーニュ方言もやや特殊な位置にあり、[22] 今後はオクシタン語（特にガスコーニュ方言）、カタルーニャ語、そしてスペイン語アラゴン方言等の相互間の関係の解明が待たれる。

3. 12世紀以前のオクシタン語におけるCTの変化形

13世紀と今世紀のオクシタン語におけるCTの変化形の分布を比較するに当たり、12世紀以前のCTの状況も把握しておくことにする。CT＞it（またはこの類似音）に変化したタイプを「it型」、CT＞ch（またはこの類似音[23]）に変化したタイプを「ch型」と呼ぶことにする。

オクシタン語による現存最古の二つの文学作品である*Boèci*と*Chanson de Sainte-Foi*を調べてみる。

10世紀から11世紀の間に成立した*Boèci*では全てit型である。[24]

fait, *Boèci*, 1：11, 4：2. dreita, 6：15. perfeitament, 5：3.

---

17) Bec (1978) pp. 34–54.
18) Meyer-Lübke (1925), Griera (1925), A. Alonso (1954) 等を参照。
19) Bec (1978) pp. 53–54.
20) Aramon i Serra (1973) p. 46.
21) Anglade (1921) p. 5.
22) ガスコーニュ方言の位置付けに関してはSchädel (1908), Baldinger (1958) 等を参照。また、Baldinger (1971) p. 914ではガスコーニュ方言をオクシタン語、フランコ・プロヴァンス語［表現は原著による］、フランス語と並んでガロ・ロマニアにおける第四番めの言語領域として考えている。
23) 中世語ではRingenson (1930) pp. 60–61においてchに[tj]（表記法は若干、変更）の音価が推定されたこともある。現代語に関しては後述する。
24) *CTVaour*, p. 138.

同じく10世紀から11世紀の間に成立した*Chanson de Sainte-Foi*においても全てit型である。

fraitura, *Foi*, fol. 22v, l. 15. cf. *PSW*, III, 578b–79a. dreitureira, fol. 16r, l. 6.
noit, fol. 20v, l. 12. fruit, fol. 15r, l. 18. fait, fol. 19v, l. 1.
Cf. aguait, fol. 22r, l. 17. aguait', fol. 16v, l. 2.

RouergueとLimousinの古文書においては12世紀中葉まではit型であるが、それ以降はch型が出現し、次第に増加している。Rouergueにおけるch型の初出例は1155年のfachaであり、Limousinにおける初出例は1140年頃のdichaである。[25] 1063年頃のCarcassonneの古文書ではdreitが見られる。[26] Bas-QuercyやAlbiの12世紀の文書ではch型が優勢であり、Toulouseではit型とch型が均衡している。[27]

Vaourの聖堂騎士団古文書集は、全115文書中の113番から115番の3文書が1200年から1202年にかけてのものである外は12世紀の文書である。この古文書ではit型が50例に対し、ch型が334例と圧倒的にch型が多い。[28]

dit, *CTVaour*, 132, dita. dig, dichas. cf. *PSW*, II, 235a–37b. fait, fag, faig, faih, facha. cf. *PSW*, III, 367b–68b. dret, dreit, dreg, dreig. cf. *PSW*, II, 297a–301a. malafaita, malafachas, cf. *PSW*, V, 44a–b.

4. 13世紀のオクシタン語におけるCTの変化形

Hermann Suchierは13世紀を中心として中世の文書を基に南フランスから北西イタリアにかけてのCTの変化形の分布図を作成した。[29] 原図は地名の下に施した青実線によりch型を、赤実線によりit型を示してあるが、本稿ではこの地図を描き直した。図2がこれである。原図はAの前のCの口蓋化との関連を調べるためにイタリア語領域まで深く入り込んでいるが、今回、この部分は関係ないので割愛した。イタリア側にもオクシタン語領域が存在するが、中世における資料が手許にないので図2には示していない。また、原図はPoitou地方にも変化形の図示がある。中世ではPoitou地方もオクシタン語領域であったため、[30] 図2においてもSuchierの通りにPoitou地方に変化形の図示をしたが、現在ではオクシタン語領域が南に後退したため、図3においてこの地域は対象となっていない。

加えて、原図にはない土地の変化形も他の資料により図2に示した。P. PansierによりAvignon、RonjatによりNarbonneに変化形の図示をした。[31]

---

25) *Ibid.*, p. 139.
26) *Foi*, p. 83, n. 3.
27) Grafström (1958) p. 203.
28) *CTVaour*, p. 139.
29) *Grundriss*, Karte VI. およびSuchier (1888) S. 593.
30) Poitou地方は、南北から交互に影響を受けた土地である。最終的には1204年以降、北フランスの影響化にある。Scharten (1941) p. 118.
31) Pansier (1924–32) I, 44. Ronjat, II, 175.

Suchier は Die における変化形を ch 型のみとしているが、Ronjat によると 13 世紀においては規則的に fait, facha であり、1325 年の文書になると dich, dicha が見られるとしているので、[32] 本稿では図 2 において両型併存に修正した。(同一地点における二種類の変化形の併存は、本稿の図 2 と図 3 において二種類の記号を部分的に重ね合わせることにより示した。)

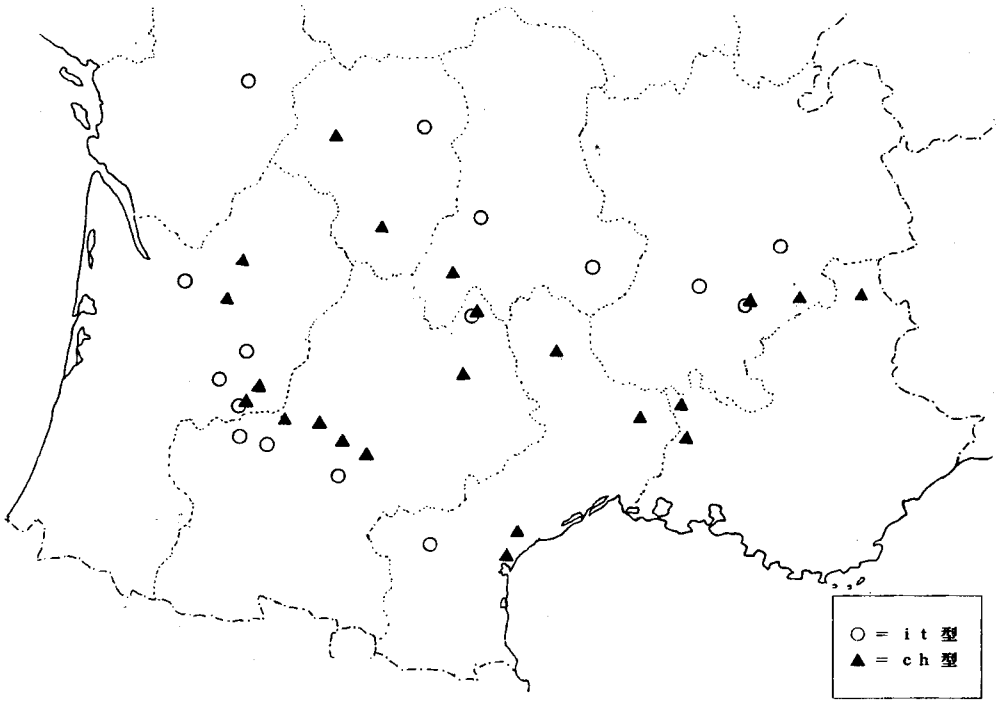

図 2　13 世紀における CT の変化形の分布

5. 今世紀のオクシタン語における CT の変化形

前章で調べた 13 世紀のオクシタン語における CT の変化形の分布と現代オクシタン語の変化形の分布を比較してゆく次第であるが、第二次世界大戦後、テレビ・ラジオ等の情報伝達手段の急速な発達により標準フランス語が深く入り込んだオクシタン語領域において純粋な[33]オクシタン語の方言資料を今日得ることは困難である。また既存の言語地図は詳細な音形の交替を表しえない場合が多い。そこで本稿では主に第二次世界大戦以前に収集した言語資料を使用して CT の変化形の分布図を作成することにする。これには Ronjat に負うところが非常に大きいが、他に G. Rohlfs のガスコーニュ方言資料 (初版は 1935 年) や、E. Hirsch が集めたイタリア Piemonte で話されるオクシタン語資料 (調査は 1950 年代初頭より)、Vicente García de Diego によるスペイン Valle de Arán のオクシタン語資料を利用した。

32) Ronjat, II, 177.
33) 「純粋」とは標準フランス語の言語的干渉を被っていないという意味である。

中世語では書法と音声の関係を完全に把握することが困難なため、it型とch型の二種類の区別しかしなかったが、現代語では詳しく分析した結果、次の四種類の型を区別した。

① (i) t型　② (i) t～ (i) ch型　③ (i) ch型
④ϕ 型（消失型）

中世語の章でも簡単に触れたが、(i) ch型の音声的実現は多様な異音が存在する。Robert Lafontも簡便なオクシタン語の音声学入門書において、プロヴァンス方言、東部ラングドック方言、一部のガスコーニュ方言では /tʃ/ は [tʃ] として実現するが、北部オクシタン語やRouergue, Quercy, Agenais間のラングドック方言等では /tʃ/ は [ts] として実現し、[s] にまで至る方言もあると記述している。[34]

Ronjatを用いて /tʃ/ の音声的実現を更に詳しく見ることにする。[35]

[ts] で実現する方言。Mistralの作品に使われる文語，Avignon, Arlesなどの Rhône川流域の方言，Aramon, Fourques, Nîmesもまた。アルプス地方の方言。特にLimone, Gap, Embrun, Valgaudemar, Corps, Valbonnais, La Mure, Besse. Drôme渓谷。Sainte-Marcel-lès-Valence, Châteauneuf-d'Isère, Valentinois（Valenceでは [tʃ]）北部Vivarais, Velai, Aurillacを除く北部Auvergne（特にPrivas, Lamastre, Gilhoc, Sainte-Bounet-le-Froid, Dunières, Montregard, Sainte-Bounet-le-Château, Sainte-Jean-Soleimieux, Le Puy, Brioude, La Chaise-Dieu, Arlanc, Craponne, Vinzelles, Volvic.）Mauriac, Murat.

[tʃ] で実現する方言。Sault, Forcalquier, 地中海方言（特にMarseille, Aix, Salon. しかしToulonでは [c].）Nice, Menton. 多くのアルプス方言。（特にAnnot, Barcelonnette, Queyras. しかしArvieux, Entracque, Roaschia, Vernante, Vinadio, Castelmagno, Acceglio, Elva, Sant-Pèire, Oncino, Grissolo, Bobbio, Val-Saint-Martin, Fernestrelle, La Graveを除く。）Valence, Annonai, Aigues-Mortes, Lunel-Viel, Lansargues, Lodève, Lamalou, Béziers, Nissan（閉鎖音は弱い），Caveirac, Uzès地域，Aigoualの二傾斜面（Alais地域では、むしろ [c]）Gévaudan（Espalionでは [tʃj]），Rouergue（語中では閉鎖音は特に弱い），Ambert, Saint-Amand-Roche-Savine, Cunlhat, Saint-Dier, Puy-de-Dôme県の東部と南東部、Limousinとの境界地域（特にPontaumur, Erment, Lastic. しかしBourg-Lasticでは [ts].）La Marche（特にSaint-Yrieix-la-Montagne, Sardent.）

[ʃ] で実現する方言。Mens, Monestier-de-Clermont, Queyras地方のArvieux, Saint-Christophe-en-Oisans, Tiers. Tiers郡とRiom郡の大部分，Narbonneの周辺，Carcassonneの周辺，低地Lauragais地域，Toulouse（Foix地方を含む），Agen, Aquitaine.

[θ] で実現する方言。Venosc.

例えば、fachoはAvignonでは [fatso], Marseilleでは [fatʃo], Mensでは [faʃo] となる。

34) Lafont (1983) p. 47. 表記は北村が変更した。
35) Ronjat, I, pp. 91-95. 音声表記は支障のない限り簡略化した。

現代オクシタン語におけるCTの変化形を前述した四類型に分類し、その分析結果を図3の分布図にまとめることにする。

以下の用例では、煩瑣になるのを避けるためRonjatの出典箇所を逐一示さなかったが、それ以外の資料を使用した場合は明記した。[36] ここでも支障のない程度に音声表記を簡略化した。以下の地名は広い領域の地方名から小さな集落名まで多種多様であり、またある地点名とそれを包含する地方名が共に示してある場合もあるが、それぞれの原資料の主旨を尊重し、分析対象としてそのまま採用した。しかし、地図作成上は若干、考慮した。図3に示すに当たり、隣接した数地点で同じ変化形の領域を形成する場合は、まとめて一つの記号で示した。

① (i) t型

Agen O. Allanche. Andonno, nöat, köat, Hirsch, S. 90. El valle de Arán (Aran), leit, laituga<LACTUCA, trueta, trueita<TRUCTA, uet<OCTO, net< *NOCTE, tet< TECTU, dret, García de Diego, pp. 236-37. pléto, Rohlfs, p. 70. <*PLICTA, *FEW*, IX, 74b. Arrens (Azun), hèt, lèt, couèt, Rohlfs, p. 142. La vallée d'Aure, pléto, Rohlfs, p. 70. < *PLICTA, *FEW*, IX, 74b. Béarn, leitugue, noueit, oueit. Bèost (Ossau), hèyt<FACTU, lèyt, coèyt, Rohlfs, p. 142. Bigorre, pléto, Rohlfs, p. 70. < *PLICTA, *FEW*, IX, 74b. Bort. Bourcet. Cahors, lat. Carcassonne. Chiomonte, köt, nöt, Hirsch, S. 17. Couserans, hurut, -te<FRUCTU. Coux, dreit, dreito, -a. Creuse. Dévoluy. Donneville.
Fanjaux. Fenestrelle. Figeac, lat. Gaillan (Médoc), nèyt, quèyt, Rohlfs, p. 121. Gorré, fait, dit, lait, adreit, Hirsch, S. 84., [37] Grand Puy, neüt, keüt, Hirsch, S. 24. La Grave. Grisolles. Grospierres. Ladern. Landes, oueyt, Rohlfs, p. 121. Laux, keut, neut, Hirsch, S. 26. Lescun (Aspe), hèyt<FACTU, lèyt, couèt, Rohlfs, p. 142. Lézignan. Luchon, pléto, Rohlfs, p. 70. < *PLICTA, *FEW*, IX, 74b. Luxey (Landes), couëit, cuit, Rohlfs, p. 121. Marche. Massiac. Mauriac. Meymac. Merlines. Montsatruc. Montregard, dreit, dreito, -a. Murat. La Mure. Narbonne. Oisans. Oulx. Pinache-Serres. Le Puy, dreit, dreito, -a. Haut-Quercy E, lat. Revel. Roaschia, kuet, Hirsch, S. 91. Saint-Bonnet-le-Château. Saint-Christophe. Saint-Flour. Salerc. Sant'Anna di Valdieri, let, fet, nüet, Hirsch, S. 87. Seiches. Sigean. Sinard. Souillac, (fait), cf. la. Torre. Toulouse. dit, -to. fait, -ito. Valdieri, adreit, tait, Hirsch, S. 88. Valence. Vernante, köet, nöet, Hirsch, S. 98. Villar Pellice. Villeneuve-sur-Lot.

② (i) t~ (i) ch型

Agde. Alès, drèicho, -a/ -CH, (fait<FACTU), cf. -ϕ. Angrogna, -CH~ -IT- ; fach, drech, cuech, dich (m.) ~faita, dreita, cueita, dita (f.). lach (n.) ~leità (v. dér.). Aurillac, -CH- ~ -T, nuèt. Bergerac, CH, IT. nèt, fait. Béziers, dich, -cho, IT. Chorges, -CH, (fait), cf. -ϕ. Eymoutiers, (I) CH, (I) T. dreicho, dreich, estrèito. Guardia Piemontese, CH, (- (I) T-, estrèito.). Laguépie, quèich<COCTU, drech. bouèit<OCTO, fait. Lamalou. Limoges, (I) CH, (I) T. dreicho, dreich, estrèito. Limousin, -CH- ~ -T. Lodève. Mazamet, CH~ (I) T, drèicho, drèich, estrèito. Moissac, CH, IT. fait. Le Mon-

36) なお、略号としてN. = 北部, S. = 南部, E. = 東部, O. = 西部.
37) Hirschはイタリア語Piemonte方言によるch型の駆逐としている。Hirsch, S. 84.

estier–de–Clermont, CH, (– (I) T–, estrèito.) . Montpezat, CH, IT. fait. Nissan, –IT–, (–CH). Nontron, –IT～ –CH– ; fait, trait (m.) ～facho, tracho (f.). cf. fa＜fach (m.). Ollières. Périgord, –CH– ～ –T, facho～fait, cf. fa. uet, guët＜OCTO. Pléaux, –CH– ～ – (T) . Pragelas, –IT～ –CH– ; fait, lait. pache, uchante＜OCTOGINTA. cf. uech＜uchante. Promilhanes, CH, lach. (dret) . Quercy, –T. (nèch) . Rieupeyroux, lièich, guëich＜OCTO, (fait) . Saint–Mamet, –CH– ～ –T. Saint–Pons, –IT, (–CH) . Sainte–Livrade, CH, IT. fait. Sarladais, –CH– ～ –T, nèi (t) . Tournon, CH, IT. fait. Vaissac, CH, IT. fait. Val–Saint–Martin, –IT–. (pacho, deipachà) . Les vallées Vaudoises.
Vic–sur–Cère, –CH– ～ –T. Vinadio, cüech, nüech, vüech＜OCTO. liet＜LECTU. Vogüé.

③ (i) ch 型

Acceglio. Agen E. Aisone, nüech, Hirsch, S. 77. Albi. Aramon, drèicho, –a.
Barcelonnette. Barjac, dreicho, –a. Bobbio. Bourgnac, drèicho, etrèicho, estrèicho. Briançon. Brousse, drèicho, destrèicho, drèich. Le Bugue, drèicho, etrèicho, estrèicho. Le Cannet, drèich (m.) , drecho (f.) . Castello, nüoch, Hirsch, S. 50.
Castelmagno. Chabeuil. Chabrillan. Charpei. Châteaufort, drèicho, –a, estrèicho, –a. Champsaur. Chiesa (Gilba Sup.) , nüöch, Hirsch, S. 55. Clelles. Corps. Coussac–Bonneval, etrèicho. La vallée de la Drôme. Elva. Excideuil, drèicho, etrèicho, estrèicho. Fontan. Florac, lèich. Gaillac, quèich. Gapençais. Gévaudan, nuèch. Gréoux, drèicho, –a. La Javie, drèicho, –a. Langogne, lèich. Limone, dits, fots, nöts, Hirsch, S. 97. Lodève. Loriol. Marsanne, drèicho, –a. Marvejols, lèich. Mens. Menton. Mézel, drèicho, –a.
Monêtier–les–Bains, cueich. Montauban. Montpellier, nioch, drech, drecha, fruch, –a, ioch＜OCTO. Najac, nèch. Nant, ioich＜OCTO. Nice, nuech. Nîmes. Nions, drèicho, –a, estrèicho, –a. Oncino. Orpierre, drèicho, –a. Porraccia, küts, nüts, Hirsch, S. 80.
Provence, drecho, drèicho (f.) , cf. dre (m.) . frucho (coll.) , cf. fru. lachugo. facho (f.), cf. fa (m.). Puget–Théniers, drèicho, –a. Queiras. Rouergue, nuèch. Saint–Étienne–les–Orgues, dreicho. Saint–Junien, drèicho. Saint–Pierre–de–Chignac, drèicho, etrèicho, estrèicho. Saint–Sauveur–de–Tinée, drèicho, –a. Sault, drèicho, –a. Ségala, nèch.
Seillans, drèicho, –a. Strepeis, nüach, küach, Hirsch, S. 73. Sumène, drèicho, –a, lèich. Uzès, drèicho, –a. Vabre, drèicho, estrèicho. Valbonnais. Valgodemar, cueich.
Vaucluse, drèicho, –a. Villefranche–de–Rouergue, nèch. Vion.

④ ϕ 型

Aix–en–Provence, nue＜ *NOCTE. Alès. Arles, niue＜ *NOCTE. Avignon, niue＜ *NOCTE. Borgo Vecchio, dre＜DIRECTU, la＜ *LACTE, nö ＜ *NOCTE, Hirsch, S. 19. Cannes, nue＜ *NOCTE. Chorges. Forcalquier, nueu＜ *NOCTE. Fourques, niu＜ *NOCTE. Gramat, la＜ *LACTE. Gourdon, la＜ *LACTE. Marseille, nue＜*NOCTE. Périgord, fa, cf. fait～facho. Provence, dre (m.) , cf. drecho～drèicho (f.) . fa (m.) , cf. facho (f.) . fru, cf. frucho (coll.) . vue (Mistral) ＜OCTO. Saint–Rémy, niu＜ *NOCTE. Souillac, la＜ *LACTE, cf. (fait) . Toulon, nue＜ *NOCTE.

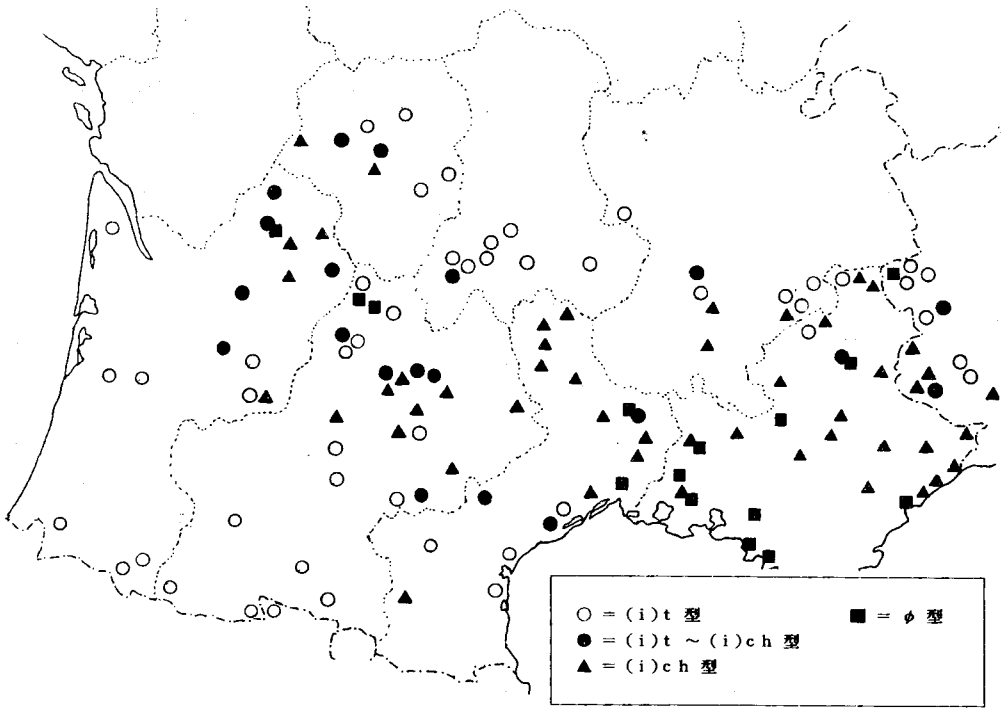

図3　今世紀における CT の変化形の分布

6. 結論

オクシタン語におけるラテン語子音連続 CT の変化形に関して、13 世紀の分布（図 2）と今世紀の分布（図 3）を比較すると、分布の様相が基本的に一致することに驚かされる。この 700～800 年間、it 型の分布と ch 型の分布がほとんど変動していないのである。Carcassonne－Toulouse－Bordeaux 線より南西の領域および中央山塊周辺の領域に it 型が分布し、これらの領域を割って入るように ch 型の領域が 13 世紀に存在していたし、今世紀にも存在している。これは、音韻変化が特定の時代に限って生ずることを如実に物語っているのである。また、北からのフランス語の浸入がオクシタン語内での（借用ではない）自然な音韻変化を妨げていることも考慮すべきであろう。

更に、今世紀の分布図から判ることは、オクシタン語領域の北部において中央山塊からアルプス山脈にかけて（イタリア領内の Piemonte 地方北西部にまで至る）(i) t 型が横たわっていることである。即ち Gap－Privas－Aurillac－Limoges を結ぶ線より北の領域である。また、(i) t 型と (i) ch 型が併存する（即ち (i) t～ (i) ch 型の）地点は散在しているものの、(i) t 型の領域あるいは (i) ch 型の領域の内部には存在せず、(i) t 型と (i) ch 型との接触領域に多く見られる。語末子音が消失した φ 型はプロヴァンス方言領域に集中して現れるのも特徴的である。

Piemonte の Gorré における fait, dit, lait などを Hirsch はイタリア語 Piemonte 方言によ

るch型の排除であるとした。[38] 確かにTorinoなどの一部の[39]イタリア語Piemonte方言ではCT>itと変化しており、fait, dit, lait, neuitである。[40] またPiemonteのオクシタン語ではイタリア語Piemonte方言と同様にn>ŋとなっており、Ostanaでpan>poŋ（Hirsch, S. 45），Castel del Boscoでman>maŋ, pan>paŋ（Hirsch, S. 34 ）、イタリア語Piemonte方言でlaŋa, lüŋa[41]である。Basso CanaveseでTorinoの言語的影響により本来のch型から外来のit型になったのと同様に[42] Torinoの方言の影響は北方だけではなく西の国境地帯まで及んでいることが判る。

最後に、今回の論稿では論じ尽くせなかったことであるが、Ch. CamprouxがGévaudanの言語調査をした時に、[43] Saint-Albanにおいて見られた音変化への形態からの圧力あるいは抑止力、即ち形容詞において女性形facho, dichoを対に持つ男性形fach, dichは 語末子音 -chを維持するのに対し、名詞のlachは容易に語末子音 -chを消失させてlaとなることなどにも言語変化のダイナミズムを感ぜずにはおられない。

略語・参考文献一覧

Alonso, A. (1954)《La subagrupación románica del catalán,》en *Estudios lingüísticos*. Madrid, pp. 11–100.

Aly-Belfàdel, A. (1933) *Grammatica piemontese*. Noale.

Anglade, Joseph (1921) *Grammaire de l'ancien provençal*. Paris.

Appel, Carl (hrsg.) (1915) *Bernart von Ventadorn*. Halle a. S.

Aramon i Serra, R. (1973)《Problèmes d'histoire de la langue catalane, 》en Badia Margarit, A. & Straka, G. (eds.) *La Linguistique catalane*. Paris, pp. 27–70.

Baldinger, K. (1958)《La Position du gascon,》*RLiR*, XXII, 241–92.

—— (1971)《Discussion》avec J. Klare au XIIe Congrès International de Linguistique et Philologie Romanes, en *Actele celui de-al XII-lea Congres Internațional de Lingvistică și Filologie Romanică*. II. București, p. 914.

Bec, Pierre (1973) *Manuel pratique d'occitan moderne*. Paris.

—— (1978) *La Langue occitane*. Paris, quatrième éd.

Boèci=Bartsch, K. (ed.) (1875) *Chrestomathie provençale*. Elberfeld, troisième éd.

Camproux, Charles (1962) *Essai de géographie linguistique du Gévaudan*. 2 tomes. Paris&Montpellier.

—— (1971) *Histoire de la littérature occitane*. Paris.

---

38) Ebd.

39) MonferratoやTorino周辺（Torinoは除く ）ではch型である。D'Ovidio&Meyer (1888) S. 559. Monferratoではlacc, *DP*, 451b.

40) Aly-Belfàdel (1933) p. 65. *DP*, p. 314b (fatもあり) , 273b, 451b–52a, 564b. 表記は北村が変更した。またKitamura (1991) p. 112. も参照。

41) Rohlfs (1949) S. 370. Lan-a, lun-a, *DP*, 454a, 480a–81b. この現象はガスコーニュ方言やガリシア語にも見られる。Rohlfs, p. 156. 北村 (1988a) 150–54頁、北村 (1989) 25–27頁。

42) Cortelazzo (1969) p. 192, n. 257. 優勢な方言形が周囲に伝播してゆく様相については北村 (1988 b) 参照。

43) Camproux (1962) I, p. 183. 表記は北村が変更した。

Cortelazzo, M. (1969) *Avviamento critica allo studio della dialettologia italiana*. Pisa.
CTVaour= 高塚洋太郎 (1973)『中世フランスのテキストの研究』東京.
D'Ovidio, F. &Meyer[-Lübke], W. (1888) „ Die italienische Sprache, " in *Grundriss*, S. 489-560.
DP=Brero, C. (1972-75) *Dissionari piemontèis*. Turin.
FEW=Wartburg, W. v. (1946-83) *Französisches Etymologisches*[sic] *Wörterbuch*. I-XXI (1), XXIV. Tübingen&Basel (Bâle).
Foi=Hoepffner, E. (1926) *La Chanson de Sainte Foy*. I. Paris.
García de Diego=García de Diego, V. (1959) *Manual de dialectología española*. Madrid, segunda ed.
Grafström, Å. (1958) *Étude sur la graphie des plus anciennes chartes languedociennes*. Uppsala.
Griera, A. (1925)《Castellà-català-provençal,》*ZRPh*, XLV, 198-254.
Grundriss=Gröber, Gustav (hrsg.) (1888) *Grundriss*[sic] *der romanischen Philologie*. I. Strassburg[sic].
Hirsch=Hirsch, E. (1978) *Provenzalische Mundarttexte aus Piemont*. Tübingen.
Jaufre Rudel=Casella, Mario (a cura di) (1950) *Jaufre Rudel, Liriche*. Firenze.
北村　一親 (1987)「スペイン語におけるラテン語 CT [kt] の音変化」『名古屋大学言語学論集』Ⅲ, 103-42.
―― (1988a)「ガリシア語音韻論の諸問題」『名古屋大学言語学論集』IV, 143-70.
―― (1988b)「イタリア語ロンバルディア方言におけるラテン語 CT の変遷」『名古屋大学人文科学研究』XVII, 53-64.
―― (1989)「ガリシア語 Ourense 方言の特徴について」『ロマンス語研究』XXII, 21-30.
Kitamura, Kazuchika (1990)《Sur les parlers franco-provençaux,》*NWPL*, VI, 29-45.
―― (1991)《El cambio fonético del grupo latino /kt/ en los romances y el albanés,》*NSH*, XX, 109-118.
Lafont, R. (1983) *Éléments de phonétique de l'occitan*. Valderiès.
Malmberg, B. (1973)《Linguistique ibérique et ibéro-romane,》en *Linguistique générale et romane*. The Hague&Paris, pp. 382-423.
Maruyama, H. (1983) *Lexic occitan-japonés*. Camacura.
Meyer, Paul (1909) *Documents linguistiques du Midi de la France*. Paris.
Meyer-Lübke, W. (1925) *Das Katalanische*. Heidelberg.
中原　俊夫 (1951)「Félibrige 概觀」『フランス語研究』3, 24-26.
中内　克昌 (1982)「オクシタニー言語事情」『福岡大學人文論叢』XIV, 1041-74.
Pansier, P. (1924-32) *Histoire de la langue provençale à Avignon du XII*[e] *au XIX*[e] *siècle*. 5 tomes. réimpression, 1974, Genève&Marseille.
Pellegrini, G. B. (1962) *Appunti di grammatica storica del provenzale*. Pisa, terza ed.
PSW=Levy, E. (1894-1924) *Provenzalisches Supplement-Wörterbuch*. 8 Bde. Leipzig.
Rasos=Appel, Carl (hrsg.) (1930) *Provenzalische Chrestomathie*. Leipzig, sechste Aufl., S. 193-97.
Ringenson, K. (1930)《Etude sur la palatalisation de K dans les parlers provençaux,》*RLiR*, VI, 31-90.

Rohlfs＝Rohlfs, G. (1970) *Le Gascon*. Tübingen, deuxième éd.

Rohlfs, G. (1949) *Historische Grammatik der italienischen Sprache und ihrer Mundarten*. I. Bern.

Ronjat＝Ronjat, Jules (1930–41) *Grammaire istorique*[sic] *des parlers provençaux modernes*. 4 tomes. Montpellier.

Scharten, T. (1941) *La posizione linguistica del "Poitou"*. Roma.

Schädel, B. (1908) 《La Frontière entre le gascon et le catalan,》 *Romania*, XXXVII, 140–56.

Suchier, H. (1888) „Die französische und provenzalische Sprache und ihre Mundarten," in *Grundriss*, S. 561–668.

高塚洋太郎 (1969)「中世プロヴァンス語におけるラテン語 -ct- の発展形について」『関西学院大学・人文論究』XIX, 1–15.